

広西方言による日本語発音学習への干渉研究

広西師範大学外国語学院副教授 陳 徳栄

1. はじめに

周知の通りに、外国語の学習者には母語による外国語学習への干渉が存在しており^(編集注1)、その干渉はプラス干渉とマイナス干渉と2種類にわけられている。もし、もっと細かく分類すれば、発音の干渉、文法の干渉、統語の干渉、考え方の干渉、発話者個人における話し方習慣の干渉などに分類できる。しかし、これらの干渉の強弱を比較すれば、発音の干渉が一番嚴重であるといえる。

本研究が対象としている広西壮族自治区（以下、広西と呼ぶ）は多くの少数民族が住んでいる自治区である。現在、広西には、壮（チワン）族、回（ホイ）族、苗（ミャオ）族、瑶（ヤオ）族、侗（ドン）族などの11民族が存在する。これらの少数民族はそれぞれの民族の言葉をもっているが、民族の文字はもっていない。学習者は同じ民族であっても、出身地もしくは育った土地が違えば、言葉も違い、各自の方言で交流し、全く言葉が通じない場合もある。

広西各地から来た日本語の学習者は言語の背景が多様であり、非常に複雑であるため、日本語の学習に自分の民族言語の発音による干渉と影響を受けている。具体的には、日本語の発音を勉強する際に、ある学習者はある仮名の発音を正しくできず発音が完全でない。例えば、「ガ」を鼻濁音に発音するというものが、母語による干渉の最も典型的な例である。この原因は日本語の音素構造と広西にある方言の音素構造との差異が存在したこと、またその方言に音素の欠落が存在したこと

によるものではないだろうか。その点からみると、学習者の母語発音の特徴と個人の発音習慣による日本語学習への干渉と影響を無視してはいけないのである。現在、母語による日本語学習への干渉研究は、すでに外国語としての日本語教育における重要な課題になっている。

2. 先行研究と本研究の位置づけ

外国語学習者の母語による干渉についての研究が数多く行われている。勿論、日本語学習者（以下、学習者と呼ぶ）の母語による干渉についての研究も行われ、成果が多くあげられている。本研究では紙幅制限により詳しく紹介できないが、主に佐治圭三の研究成果を例として説明したい（佐治、1992）。

佐治（1992）は日本への中国人留学生を研究対象として、中国人留学生の作文やそこに表れたミス进行分析し、それらのミスを「文字・表記のミス、単語のミス、字形のミス、語彙意味のミス、文法のミス、表現のミス」などの6種類にまとめた。

ところが、日本語学習者の母語による干渉についての研究の大部分が干渉現象の分析にとどまっておらず、干渉が起こった原因についての研究はまだ不十分である。例えば、学習者の日本語学習に学習者の母語がどのように干渉してくるかについての研究は数少なく、成果も少ない。特に広西における日本語学習者の母語による干渉についてはほとんど研究が行われていない。

よって、更に詳しく研究する必要がある。しか

し、今までの研究で提出した問題は普遍的であり、現場の日本語の教師が注意すべき点でもある。そこで本研究は佐治（1992）などの研究を踏まえて、広西における日本語学習者の学習過程を教師の立場から観察し、広西方言がどのように日本語発音の学習に干渉するかについて考察する。

3. 広西方言による日本語発音の学習への干渉分析

本節では研究対象や研究方法・過程、考察結果について紹介し、また例をあげて具体的な干渉現象を分析したい。

3.1 研究期間と研究対象

研究期間は2000年9月1日から2008年7月15日にかけての約8年間である。

研究対象は広西の各地から来た1,290人の学習者である。これらの学習者は主に筆者の教えていた広西師範大学外国語学院や桂林市旅行専門学校外国語学部や桂林電子科学技術大学外国語学部および桂林市中日友好書道学校などの在校生である。学習者の専攻から分類すれば、日本語専攻生と非日本語専攻生との2種類にわけられる。日本語科の専攻生は310人であり、310人の専攻生の中には、2000～07年学級のあわせて8期の日本語科の学生150人と社会人の日本語専攻生160人がいる。

対して、非日本語科の学習者は980人いる。ここでの非日本語科の学習者は日本語を第二外国語あるいは趣味として勉強したほかの学部の学生、大学院生および通信教育の学生である。以上の1,290人の学習者のほとんどが広西の各市・県から来ている。

地域範囲からみると桂北地方は780人で^(編集注2)、これは学習者総人数の60.5%を占めている。そのうち桂林市と柳州市は316人で、これは学習者の総人数の24.5%程度を占めており、桂北地方の学

習者総人数の約40.5%を占めている。桂北地方のその他の市・県の出身者は464人で、これは学習者の総人数の36%程度占めており、桂北地方の学習者総人数の59.5%程度占めている。

桂南地方は510人で、これは総学習者の39.5%を占めている。そのうち、南寧市は104人で、これは学習者総人数の8%程度を占めており、桂南地方の学習者総人数の20.4%を占めている。桂南地方のその他の市・県・町・郷の出身者は406人で、これは学習者総人数の31.5%程度を占めており、桂南地方の学習者総人数の約79.6%を占めている。

民族の構成からみると、漢民族の他、壮族、回族、苗族、瑶族、侗族、毛南（マオナン）族の学習者がいる。広西におけるほとんど全ての民族の学生が存在し、学習者の構成からみると学習者の成長背景や母語の複雑さが分かる。

次節では研究方法および研究過程を紹介する。

3.2 研究方法と研究過程

本研究は主に観察記録法を利用して研究するものである。即ち、講義中、学習者の学習状況を観察して記録する。特に学習者の日本語発音学習段階（以下、発音学習と呼ぶ）と学習者の日本語会話練習（以下、会話練習と呼ぶ）を重点として学習者の学習状況を観察・記録する。具体的な方法は以下の通りである。

(1) 発音学習の入門段階では学習者の発音をそれぞれ録音・テストして、発音のミスを学習者の出身地（もしくは育った土地）によって別々に記録しておく。

(2) 授業中、学習者の口頭での作文練習を観察・分析し、学習者の発音ミスを探し、そのミスを学習者の出身地（もしくは育った土地）によってそれぞれ記録しておく。

(3) 学習者の課外活動の会話練習を観察し、学習者の発音ミスを探し、そのミスを学習者の出

身地（もしくは育った土地）によってそれぞれ記録しておく。

(4) 会話試験と通訳試験の内容を録音する。録音から学習者の発音ミスを探し、そのミスを学習者の出身地（もしくは育った土地）によってそれぞれ記録しておく。

(5) 学習者のミスに焦点をあわせて、書き取りテストをさせ、テストの結果を学習者の出身地（もしくは育った土地）によってそれぞれ記録しておく。

記録内容の正確さを高めるため、記録内容を学習者の出身地と照合しながら、まとめて分類する。学習者のミスの共通点を探して、対比分析し、そのミスが起こった原因を探求する。具体的には、学習者を出身地によって桂北地方と桂南地方の学習者2つグループにわけ、言語の地域によって桂（林）柳（州）語（瑶語・苗語を含める）、壮語、広東語（広西白話）、客家語など4つの方言グループにわけた。広西は民族が多く雑居している少数民族地方で、漢民族がほかの民族と生活しており、各民族の言葉が互いに影響している。

地縁学からみると、桂東北の桂柳語と桂北西の壮語は互いに影響しており、桂北に生活している人々が日常に使う言葉は桂柳語である。そこで、この2地方から来た学習者は、干渉が起こる原因がよく似た学習者として研究、考察する。

一方、桂南の広東語と桂南西の壮語と桂東南の客家語とは互いに影響しており、この地方に住んでいる人々は日常の交流に広東語（桂南西の壮語または桂東南の客家語）を使っている。そこで桂南から来た学習者は、原因がよく似た学習者として研究、考察する。

同じ壮語でも住んでいる地域周辺の言葉に影響されるため、桂北西の壮語と桂南西の壮語とは多少違いがあり、完全に違う言葉でもある。そこで本研究では地縁学からの分類法を利用している。

3.3 考察の結果

以上の分類法で分類した学習者の学習過程を考察、分析すると、次の結果が明らかになった。

桂北の各市・県・郷・町・農村から来た学習者464人のうち、全ての学習者が1回以上鼻濁音の「が」を「あ」に、「な」を「ら」あるいは「ら」を「な」と間違っただけで発音した。ある学習者はしばしば発音のミスを犯している。その上、卒業するまで鼻濁音の「が」を「あ」と間違っただけで発音する日本語の専攻生もいる。桂北の桂林市と柳州市から来た学習者は316人いるが、そのうち127人の学習者が少なくとも1回以上鼻濁音の「が」を「あ」と間違っただけで発音した。これらの学習者は学習者総人数の9.8%を占めており、両都市の学習者の40.2%を占めている。鼻濁音の「が」を「あ」と間違っただけで発音した桂北の学習者は591人もおり、これは学習者総人数の45.8%を占めており、桂北の学習者の75.8%を占めている。

桂南の各市・県・郷・町・農村（南寧市を除く）から来た学習者406人のうち304人に、少なくとも1回以上「た」行を「だ」行に間違っただけで発音がみられた。これは学習者総人数の23.6%を占めており、南寧市を除いた桂南地方から来た406人の学習者の74.8%を占め、464人の桂南学習者の59.6%を占めている。なお、このミスをした南寧市出身の学習者は非常に少ないため、ここでは無視して計算する。

壮語の影響を受けた貴港市（桂南地方）と河池市（桂北地方）両市における英語科通信教育の学部生（あわせて125人）の日本語発音をテストした時、80人の学習者が「た（だ）」行を「だ（た）」行に、「ば」行を「ぱ」行に間違っただけで発音した。抽出された学習者は、清音を濁音化する率が62.0%に達した。これは学習者の総人数の6.2%を占めている。また、桂東南から来た167人の学習者はしばしば「し」を「す」と、「地（ち）」を「つ

と間違って発音した。これは学習者の総人数の13.0%を占めており、桂南から来た464人の学習者の32.7%を占めている。

また、筆者は1,290人の学習者の学習過程を観察、整理した際に次のことが判明した。

- 全ての学習者は元来無気音の「か」・「た」・「ぱ」行の発音を有気化し、無声音を有声化した。

- 1,290人中412人の学習者は長音（短音）を短音（長音）化し、これは学習者総人数の31.9%を占めている。

- 526人の学習者は無声音の促音を有声化し、これは学習者総人数の40.1%を占めている。

- 191人の学習者は少なくとも1回以上拗音をわけて長音化した。

以上のミスを犯した学習者が広西の全域に分布している。その他、発音「ン」をしばしば外すのが桂北からきた学習者である。また、発音「ン」を随意に挿入するのは全ての地域の学習者にたまにみられる。それは学習者の個人の発話習慣によるものと思われる。そのため、本研究では発音「ン」を随意に挿入、もしくは外した人数の記録、統計をとっていない。

以上のデータからみると、次のことが分かる。

広西における学習者の母語による日本語学習への干渉が存在していることは普遍的現象であり、ある干渉現象は非常に嚴重なことである。干渉現象は3つの特徴がある。

(1) 人里離れた辺鄙な地区から来た少数民族の学習者にはその母語による日本語発音の学習への干渉が一番深刻である。都市、特に大都市から来た学習者にはその母語による日本語発音の学習への干渉が相対的に軽い。この干渉の強弱が桂南西・桂北西などの人里離れた辺鄙な農村>桂東北・桂東南などの農村>町・中都市>大都市というモデルで分布している。

(2) 母語による干渉現象は学習者の民族とあ

まり関係なく、学習者の出身地（住んでいる所）または出身地で使われている言語と関係が深い。

(3) 標準語（普通語）や英語の発音がいい学習者はその母語による干渉は標準語（普通語）や英語の発音が悪い学習者の母語による干渉より極めて軽い。

また、干渉現象には地方性がある。即ち、同じ地方から来た学習者は日本語発音の学習に受けた母語干渉が同じである。その干渉現象は簡単に次の11種類にまとめられる。

1. 清音の濁音化。
2. 子音の取替え。
3. 子音の弱化または完全に無声化。
4. 同行仮名の混淆または舌位置の間違い。
5. 長音の短音化または短音の長音化。
6. 長音の分裂化。
7. 拗音の分解。
8. 促音母音の有音化。
9. 弱母音の強化。
10. 無気音の有気化。
11. 不用意な撥音「ン」の挿入または脱落

以上の11類型のうち1～4類型の干渉には明らかな地方性があり、一番深刻である。5～8類型の干渉は全広西の学習者にあり、明らかな地方性がない。1, 9, 10の3つ類型の干渉は主に壮語（民族と関係なく、壮族人のほか、ほかの民族の人も壮語を母語として使う）を母語として使った学習者にある。11類型の干渉は発話者の個人の発話習慣によるものである。

次節では学習者の発音ミスを例としてあげながら、以上の干渉現象を分析する。

3.4 結果の分析

第1に清音の濁音化である。清音の濁音化現象は主に子音が「k」, 「t」, 「p」の「カ」行, 「タ」行, 「バ」行に起こる。次の例文をみてもらいたい。

例①:「海港」という言葉の発音は「かいこう (kaikou)」と発音すべきであるが、多くの学習者はその言葉を「外交・がいこう (gaikou)」と発音した。

例②:ある学習者は「綿・わた (wata)」を間違えて「和田・わだ (wada)」と発音した。

例③:ある学習者は「靴下・くつした (kutsushita)」を間違えて「くズしだ (kuzushida)」あるいは「くつしだ (kutsushida)」、崩した・くズした (kuzushita)」と発音した。

例④:ある学習者は「パパヤ (papaya)」を間違えて「ばばや (babaya)」と発音した。

例①, ②, ④より, 学習者は子音「k」を「g」に, 子音「t」を「d」に, 子音「p」を子音「b」に間違えて発音した。即ち, 「カ」行, 「タ」行, 「パ」行の仮名を間違えて, その相対的な濁音の「ガ」行, 「ダ」行, 「バ」行の仮名に発音したということが明らかになった。3.3項で述べてきたように, このような母語による干渉を受けて清音を濁音化した学習者は主に壮語を母語とした (または壮語の影響を受けた) 桂北西・桂西南の学習者である。

例③より, 例②のようなミスを実すとともに, 清音の「tsu」を濁音化して「z」と発音した, ということも分かった。例③のような「tsu」を濁音化した「z」と発音したのは桂北西・桂西南の学習者のほか, 広東語・客家語を母語とした桂東南から来た学習者にもみられる。理由は周知の通り, 子音「k」, 「t」, 「p」の「カ」行, 「タ」行, 「パ」行の仮名は, 頭音を除いて全て無気音に発音すべきである。しかし, 壮語には無気音がないため, 無気音に発音すべき無声子音「k」, 「t」, 「p」の「カ」行, 「タ」行, 「パ」行の仮名を間違えて有声音の「g」, 「d」, 「b」に発音するしかできない。そこで, 清音の濁音化になる。その点については, 同じ地方における人々の会話からもみられる。

例えば, いつも「空・kōng」を「公・gōng」, 「他・

tā」を「搭・dā」, 「趴・pā」を「八・bā」に発音している。同様に, 広東語と客家語を母語とした学習者のミスが出た原因も, 広東語と客家語には無気音が欠陥するからである。

第2に子音の取替えである。子音の取替えとはつまり, 発話者が話中に無意識に音素の仕組みの子音を似た別の子音にした現象である。この現象は広西学習者における子音「n」の「な」行仮名の発音によくみられる。次の例をみてもらいたい。

例⑤:「七 (nana)」を間違えて「奈良 (nara)」またはララ (rara)」と発音した。

例⑥:「何 (nani)」を間違えて「ナリ (nari)」またはラリ (rari)」と発音した。

例⑤, ⑥より, 共通点は学習者が子音「n」を「r」と発音したことであると分かる。このようなミスは学習者の故意行為ではなく, 学習者の母語による干渉の結果である。このようなミスを犯した学習者は主に桂柳語を母語とした桂北学習者, または桂柳語に深く影響された壮語を母語とした桂北西の学習者である。しかし, このようなミスは広東語・客家語を母語とした桂南学習者または広東語に深く影響された壮語を母語とした桂西南の学習者にはほとんどみられない。

なぜ桂北の学習者は容易に子音の取替えというミスを犯すのか。桂柳語には鼻子音「n」が欠落しているためであると思われる。これは桂北地方の日常会話からわかる。例えば, 桂北地方の人は常に「拿・ná」を「lá」に, 「南・nán」を「欄・lán」と発音している。桂柳語の鼻子音「n」の欠落のため, 桂北地方の人々は日常会話に「n」の音を使う場合, 無意識に「l」の音で取り替えている。また, 日本語の「r」音が中国語の「l」音とおおむね同じであるため, 学習者は「な」行仮名の発音をする時, 母語の干渉を受けて無意識に「ら」行の発音にする。

第3に子音の弱化または完全な無声化である。

これは学習者が発音の過程で子音の発音をせずに、完全に子音を失わせる、あるいは子音を無声化する現象である。このようなミスは主に桂北の学習者が「が」行の鼻濁音を発音する時、一番容易に犯す誤りである。これも一番直し難いミスである。次の例をみてもらいたい。

例⑦:「大学・だいがく (daigaku)」を間違って「大悪・だいがく (dai-aku)」と発音した。

例⑧:「打撃・だげき (dageki)」を間違って「唾液・だえき (da-eki)」と発音した。

例⑦, ⑧中の「ガ」と「ゲ」は現代日本語の発音要求によると、子音の「g」は鼻濁音の「ŋ」と発音すべきであるが、学習者が鼻濁音の「ŋ」を発音できないため、括弧内の“~”の部分のようにその子音の「g」を外し、有声音母「a」, 「e」しか保留していない、ということが分かった。

なぜ桂北の学習者は子音の弱化, または子音の無声化とのミスをするのか。これは桂柳方言に鼻濁音の「ŋ」が欠落するからであると思われる。桂北から来た学習者はその母語の桂柳語の発音習慣による干渉を受けて、鼻濁音の「ŋ」を発音する時、「ŋ」の発音が短すぎて、聞き手にはっきり聞こえない、若しくは完全に発音せずに、完全に無声化にさせ、母音「a・i・u・e・o」しか残していない。この干渉は初心者学習者にだけでなく、日本語能力が相当高い学習者にも存在しており、広西における学習者の母語による干渉現象の中で一番典型的なことである。

第4に、同行仮名発音の混淆または舌位置の間違いである。このような干渉を受けた学習者は主に客家語と広東語を母語とした桂南から来た学習者にみられる。その上、そのミスは主にサ行の「シ」と「ス」の間およびタ行の「チ」と「ツ」の間に出る。学習者はいつも「シ」を「ス」に、「チ」を「ツ」に発音する。次の例をみてもらいたい。

例⑨:「私達・わたしたち (watashitachi)」を「わ

たスたツ (watasutatsu)」と発音した。

例⑨より、この問題は母音の混淆、つまり母音の「i」が母音の「u」に替えられたようである。実際に問題は「sh・ʃ」と「ch・tʃ」この2つの子音に存在している。

なぜ、このようなミスが桂南の学習者によくみられるのか。この原因は、客家語と広東語に音素の「sh・ʃ」と音素の「ch・tʃ」が欠落するからであると思われる。学習者は「sh」と「ch」を発音する時、舌が「sh・ʃ」と「ch・tʃ」の位置に届かずに、それぞれ「s」と「ts」の位置に着き、母語の発音に影響にされ、知らないうちに「i」の口形も「u」の口形になってしまい、同行仮名発音の混淆になってしまう。

これは広東語と客家語を母語とした桂南における人々の日常会話によくみられる。例えばいつも「吃飯・chīfàn (食事をするという意味)」を「七飯・qīfàn」と発音する。それは中国でも物笑いの種になっている。

ここまで述べてきたように第1~4までの干渉現象は明らかに地方性をもっている。

第5に長音の短音化または短音の長音化である。つまり、元来は二拍の音節で発音すべき言葉を一拍の音節に、または一拍の音節で二拍の音節に発音する現象である。次の例文をみてもらいたい。

例⑩:「上手・じょうず (zyouzu)」を「じよず」(zyozu)と発音した。

例⑪:「遠慮・えんりょ (enryo)」を「縁量・えんりょウ (enryou)」と発音した。

例⑩より、元来は長音の「u」を略して、長音を短音化した。それに対して例⑪では元来はない長音の「u」を加えて短音を長音化した、ということが分かった。

第6に長音の分裂化である。つまり、元来、前の仮名の長音の符号として使われている「う」, 「お」を学習者がその前の仮名と分裂してそれぞ

れ発音する現象である。次の例をみてもらいたい。

例⑫: 元来「くう」と「こう」二音節しかない「空港・くうこう (kūkō)」を分解して4つの音節「ク (ku)」と「ウ (u)」と「コ (ko)」と「ウ (u)」と発音した。

例⑬: 元来「おお」と「きい」二音節しかない「大きい・おおきい (ōkī)」を分解して4つの音節「オ (o)」と「オ (o)」と「キ (ki)」と「イ (i)」と発音した。

例⑫と⑬より、長音の符号として使われた「ウ」と「オ」をその前の仮名と分解して発音したのは、「ウ」段仮名の後ろに「ウ」または「オ」段仮名の後ろに「ウ」あるいは「オ」を受けると「ウ」と「オ」が長音符号として発音せずに、前の仮名の発音が一拍伸びて二拍と発音するという日本語の発音規則に違反した、ということが分かった。

第7に拗音の分解である。拗音の分解とは拗音の一部としての「ャ・ユ・ョ」と拗音を構成した音素の「キ・シ・チ・ニ・ヒ・ミ・リ・ギ・ジ・ビ・ピ」とを分解して、それぞれ単独の発音として発音する現象である。つまり、元来、一音節の拗音を2つ音節にわけてしまう発音現象である。次の例をみてもらいたい。

例⑭: 「病院・びょういん (byouin)」を間違って「美容院・びょういん (biyouin)」と発音した。

例⑭より、元来の拗音符号の「よ」を分解して発音したのは明らかになった。この類のミスは主に非日本語の専攻生と日本語専攻生の初心者に存在している。学習者の学習に伴って、完全に避けられる。これは干渉現象で一番軽いものである。

第8に促音母音の有音化である。つまり、元来発音せずに発音の口形と発音時間を保つ促音音節の「ッ」を有音化する現象である。次の例をみてもらいたい。

例⑮: 「学科・がっか (gakka)」を「がツか (gatsuka)」と発音した。

例⑮より、元来発音せぬ促音の小文字「っ」を発音して「ツ」になったことが分かった。ローマ

字で書けば、双書きの子音「k」を「tsu」にしたことになる。

以上の第4～8までのミスは全広西の学習者によくみられ、明らかな地方性をもっていない。なぜ広西の学習者がそれらのミスを犯すのか。それは中国語（勿論広西の方言も含む）の音節と日本語の音節の仕組みが違うからであると思われる。広西方言の表記には日本語のような拗音音節と促音音節がないし、長音音節もない。特別な感情を表すのに発音規則を破らなければならない場合を除いて、広西方言の発音規則では、1つ1つの字の発音の長短は同じである。

拗音とは日本語の特有の発音ではなく、古代日本人が古代の漢文や典籍などを閲読するため、漢語から借りた発音である。その音素の仕組みは「キ・シ・チ・ニ・ヒ・ミ・リ・ギ・ジ・ビ・ピ」と「ャ・ユ・ョ」とそれぞれ結び付き、例えば、「キャ・キュ・キョ」のような1つの音節にするものである。表記には2つの仮名を用いるが、発音は1音節だけで発音する。そこで、学習者は日本語の拗音を読む時、母語の表記に影響され、1つの音節の拗音を2音節にわけてしまい、拗音を分解してしまう。

促音とは日本語の特有の発音であり、その音素の仕組みは首尾の発音を除いて、無声子音「k・s・t・h・p」の間に挟まれた無声母音「i・u」が無声化しやすい。母音の無声化が進むと、母音が完全に脱落して、促音化する。つまり、例⑮のように「学科」はローマ字で表記すれば「gakka」になり、子音の間に挟まれた母音が完全に脱落し、子音も音声を出せず、只子音の発音時間と母音の口形を保つ発音現象である。それに対して広西方言は中国に属している言語のため、仕組みに日本語のような無声子音が重なることはなく、発音規則では1つ1つの文字を発音しなければならない。そこで、学習者は日本語発音をする時、知らないうちに、母語発音の習慣によって、それぞれの音節を発音

してしまい、日本語の促音を有声化してしまうのである。

なお、同様の原因で、広西方言は音素構造と発音規則が日本語と違い、長音や長音表記がないため、学習者は日本語の長音を発音する時、母語発音の習慣によって、1つの音節の長音符号を2つの音節にわけてしまい、長音を短音化してしまう。一方、短音を発音する時は、知らないうちにその短音を伸ばして、長音化してしまう。後者は母語の干渉と違って、長音と短音の混乱によるものであり、注意すれば完全に避けられると思われる。第9に弱母音の強化である。弱母音の強化とは元来弱音とする無声母音を強化して有声音に発音する現象である。この発音法は間違いとはいえないが、なんとなく標準的な発音ではなく、違和感を与える。例えば、

例⑯：「教室に学生がいます・きょうしつにがくせいがあります」を「きょうしつにがくせいがいます (kyoushitsu ni gakusei ga imasu, 下線部は強化した音)」と発音した。

例⑯より、無声母音「u」を有声音「u」に強化して発音したことがわかった。

しかし、日本語には『i』と「u」の2母音は無声化しやすく、他の3母音は無声化しにくい。無声子音（カ行・サ行・タ行・ハ行・パ行の子音）の間に挟まれた母音や無声子音の後ろにある語末の母音が無声化しやすい（田中，窪菌，1999）という発音規則がある。この発音規則によると、例⑯での標準的な発音はkyoushitsu ni gak[u]sei ga imas[u]（[u]は無声音）と発音すべきである。つまり「u」をはっきり発音せず、只子音の「k」と「s」の発音しか聞こえないように、ということである。よって、例⑯の発音法が不自然な発音であったことが明らかになった。

理由は、原因が2つあると思われる。1つ目に、学習者は日本語の無声発音規則が分からないこ

と。2つ目に広西方言には日本語のような発音規則がないため、学習者は日本語の無声発音規則がわかっても、実際の会話中に母語の干渉を受けて、知らないうちに無声母音を強化して、有声音にしたことである。

第10に無気音の有気化である。つまり、気流を出して、元来無気音の音節を有気化する現象である。このような発音法は間違いではないが、確かに不自然な発音法である。次の例をみてもらいたい。

例⑰：「わたし (watashi)」を「わたし (wata-shi, 上線部は気流を出すの意)」と発音した。この例では、学習者は気流を出して、元来無気音の「た」を有気化した。日本語には「カ」「タ」「パ」行の仮名は言葉の頭音を除いて、全て無気音と発音すべきであるという発音規則がある。しかし、広西方言には無気音がないため、学習者は日本語の無気音を発音する時、母語の影響を受けやすく、無意志的に有気音として発音してしまう。

ここまで述べてきたように、無気音の有気化になる原因が、広西方言に無気音が欠落することにあることを明らかにした。

第11に不用意な撥音「ン」の挿入または脱落である。つまり、学習者は日本語を話す時、不注意に余計な撥音「ン」を挿入または外して発音する現象である。次の例をみてもらいたい。

例⑱：「卵なんて」を「卵ナテ」に発音した。この例のように無闇に「ン」を外して発音するのはあまりみられないが、桂北から来た学習者にたまにみられる。それは桂柳語には鼻発音「n」と「ŋ」が欠落するため、学習者が母語に干渉されたからだと思われる。

例⑲：「学生・がくせい」を余計な撥音「ン」を入れて「がくせいン」と発音した。このミスは普遍的現象であり、全ての学習者によくみられる。それは学習者の個人の発話習慣と関係があると思

われている。人々は考える時間を作るために無闇に「ええーと」や「そうね」や「あの」などの言葉を挿入して話すことと同じ道理である。

4. 終わりに

本研究は広西で学んでいる日本語学習者の学習過程を観察して、学習者の母語による干渉現象を簡単に次の11種類にまとめた。

1. 清音の濁音化。
2. 子音の取替え。
3. 子音の弱化または完全に無声化。
4. 同行仮名のコンコウまたは舌位置の間違い。
5. 長音の短音化または短音の長音化。
6. 長音の分裂化。
7. 拗音の分解。
8. 促音母音の有音化。
9. 弱母音の強化。
10. 無気音の有気化。
11. 不用意な撥音「ン」の挿入または脱落

上記の11種類の現象を巡って、学習者のミスを例としてあげながら、その干渉現象を起こした原因を分析し、次のように結論をまとめた。

広西で学んでいる日本語学習者の、日本語発音の学習および日本語で会話の過程への母語による干渉現象が深刻であり、その干渉には地方性と特殊性がある。まず、学習者出身地の地理位置から分類すると桂北と桂南の二大地域にわけられる。学習者母語から分類すると、桂柳語、広東語、客家語、壮語などの四大言語にわけられる。これらの地方方言による学習者の日本語学習への干渉と影響は程度が異なり、干渉された発音も異なっており、学習者の日本語学習を致命的に阻害している。それらの干渉を起こした原因は主に広西方言にある音素の欠落であり、広西方言の音素構造、発音規則および学習者の発音習慣が日本語と違っ

ているからである。

本研究では問題を解決する方法を提出できなかったが、客観的に問題を提起、分析し、問題の起こった原因を指摘した。本研究は広西における日本語の教育と学習の進展に一定の貢献をし、今後の広西における日本語の教育および教育研究にとって意義があるだろう。

編集注

- (注1) 学習者の母語が第二言語学習に与える悪影響のことを母語の干渉と呼ぶ。
- (注2) 広西壮族自治区の略称は「桂」であり、以下、広西の各地域を「桂北」、「桂南」などと呼ぶ。

参考文献

- 佐治圭三 (1992) 『外国人が間違えやすい日本語の表現研究』ひつじ書房
- 田中真一、窪菌晴夫 (1999) 『日本語の発音教室 理論と練習』黒潮出版